



早朝6時、出港前に前日の漁具合を話す親子。

人間はボンクラになってしまった。すべての生きものには天敵がいるのに、人間だけは征服した気でした。そうではないとコロナによって思い知らされた。困れば鉢巻きを巻いて船玉を求める。人間は幼稚になってしまった。

鈴木重作(じゅうさく)さん(67)は、ひとつ息を吐くように切れ目なく語った。顔じゅうに刻まれた深い皺が影を作り、海を見る表情は険しさを増した。

49年前の海

東の山々がオレンジ色に染まり、真っ黒だった空と海が、朝日を浴びてじんわりと青く輝きはじめた。山の上に浮かぶ雲の形を見て何時の間後にもど方向から風が吹くかを予想する。細かい波が立っているから東風が吹いている。南にある島の姿がはつきりと見えているから明日は南風が吹く。重作さんは舵を取りながら、あちこち指差して教えてくれた。「今はいろんな機械や

ら情報があっけど、俺が漁師になったころはこうやって海を見てた」。

重作さんが漁師になったころの、49年前の海に戻ってみよう。1972(昭和47)年、彼は地元の水産高校を卒業して遠洋船の乗組員になった。一年中マグロやイカを追いかけて巡航し、給油のために1ヶ月半に一度寄港する以外は船の上で暮らした。朝も夜もなく漁場に到着すれば仕事が始まり、ひとたび漁が始まると16時間もぶっ通しで働くことを当たり前だった。労働は過酷を極めたが、陸の仕事よりも身入りがよく船には若者が集まっていた。そんな日々が9年続いた。1年に1日の休みもなく、「さすがにこれでは見合もできね」と帰郷し、父の船に乗って働いた。父も昔は遠洋船に乗っていたが、胃癌が見つかって地元に戻ってきた。身体が悪いため大きな船には雇ってもらえず、自ら船を建てた。

父は「刺し網漁」をしていた。刺し網漁とは、網を海の中に投げ込み、通った魚が刺さるように網にか



1.高台から小波渡(こばと)地区を望む。2.鈴木重作さんと息子の重慶(しげのり)さん(33)。3.小波渡漁港には親子の船が2艘あるばかりだ。

基本的に海は厳しい。厳しいのに人間は安心安全を求めた。河岸をコンクリートで固め、海にはテトラポットを沈めた。昔は砂浜が潮の流れに乗って動いたもんだ。夏は北側へ、冬は南側へ。そうやって海水に洗われた砂粒は、海の中でろ過機能を果たしていた。山から供給される植物プランクトンが川を伝って流れてきた。今ではそれらが失われ、ずいぶん貧相な海になった。東日本大震災によって、自然を人工物で塗り固めることの愚かさを痛感した。直後は「減災」と叫ばれたが、しばらくすると再びカネが物を言い始め、風向きは「防災」に、いつの間にか「国土強靱化」になった。この公民館も高台への移転が決まっている。ケッツ(背後)には山があり、天然の避難所が至る所にある。津波が来れば逃げればいいのに、百年に一度の災害が怖くてじっとしていらね。指一本で世界中の情報が手に入る。自分で考えることをやめ、答えをすぐ求める。安全ばかりを求めるから危機意識がない。